

オンライン講座「がんを知る」の効果

田城孝雄¹⁾・渡邊清高²⁾

Online Course Understanding Cancer in Japan

Takao TASHIRO, Kiyotaka WATANABE

要旨

現在、国民の2人に1人が、一生のうちに何らかの「がん(cancer)」にかかる(罹る)と推計されている。がんという病気、その原因、予防や治療の概要について、入り口になるような知識と対応策を知ることは、自分だけでなく周りの大切な人(家族・友人)を守ることにつながる。また、がん患者とその家族は、精神的、身体的な不安や、仕事と治療の両立が難しいなどの社会的苦痛(不安)も抱えている。この不安を解消するため、病気の解説だけでなく、がんがもたらす患者・家族への不安や苦痛を解決するため、社会学的、公衆衛生学的課題や、医療倫理、創薬や医療技術開発、医療政策や福祉政策など多様な視点から、「がん」について講義を行うオンライン講座「がんを知る(Understanding Cancer in Japan)」を開講した。

講師と受講生の双方向性に留意して、講義以外にも、メールマガジンによる情報提供や、フォーラムなどにより、講師と受講生と、受講生間のコミュニケーションが、よく取れている。放送大学では、学生(受講生)が孤独になりがちであるが、本講座では、受講生間の連帯感も生まれており、講義(学期)終了後も、希望者がメーリングリストで繋がっており、学生にとっても好評である。そのため、受講者数が、700人から、徐々に増加している。なお、本講座は、一連のヘルスケアリテラシー教育の講座の一つである。

ABSTRACT

Currently, it is estimated that one in two Japanese people develop some type of cancer in their lifetime. Gaining introductory knowledge of this disease, its causes, prevention and treatment, and knowing how to cope with it will not only help people protect themselves but also their loved ones (family and friends). Cancer patients and their family feel anxious both mentally and physically, and they also experience social distress (anxiety), such as difficulty to work while receiving medical treatment. To help resolve the anxiety and distress that cancer brings on patients and their family, an online course called "Understanding Cancer in Japan" has been started; in this course, in addition to explanation of the disease, lectures on cancer are offered from different perspectives, including sociology and public health sciences, medical ethics, development of new drugs and medical technology, health policies and welfare programs. Emphasizing interactivity, apart from lectures, information is provided in e-mail newsletters and forums, which has resulted in good lecturer-student and student-student communication. Although students at the Open University of Japan tend to feel isolated, this course has helped build a sense of unity among the students; even after the end of the course (semester), those who are interested are connected via a mailing list, which has gained popularity among students. For this reason, 700 students have taken this course and the number is gradually increasing. This course is one of the series of health care literacy education courses.

1. 背景

日本では、1981年より、がんが死亡原因の1位となり、死亡率は増加している。2013年には、年間36万人

の方ががんで亡くなり、1年間で85万人の方が新たにがんと診断されている。¹⁾ 2016年の人口動態統計及び国民生活基礎調査では、65歳以上の死亡原因の約30% (28.5%) が、悪性新生物(cancer)であった。(図2)

¹⁾ 放送大学教授(「生活と福祉」コース)

²⁾ 放送大学客員准教授・帝京大学医学部准教授

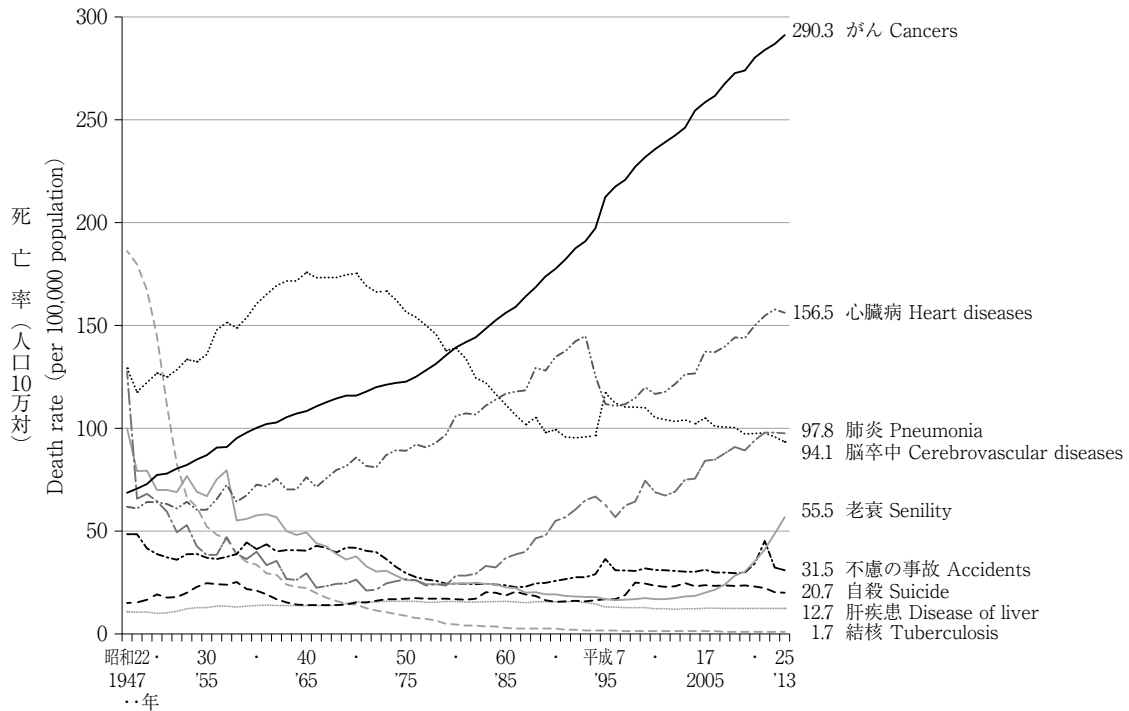


図1 主な死因別にみた死亡率の年次推移

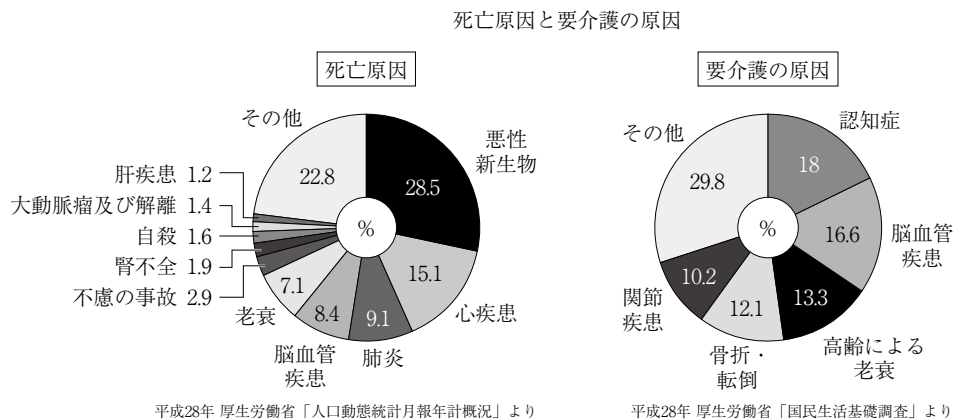


図2 65歳以上の死亡原因

2011年の国立がん研究センターがん対策情報センターによる推計値によると、国民の2人に1人が一生のうち何らかのがんに罹患する。

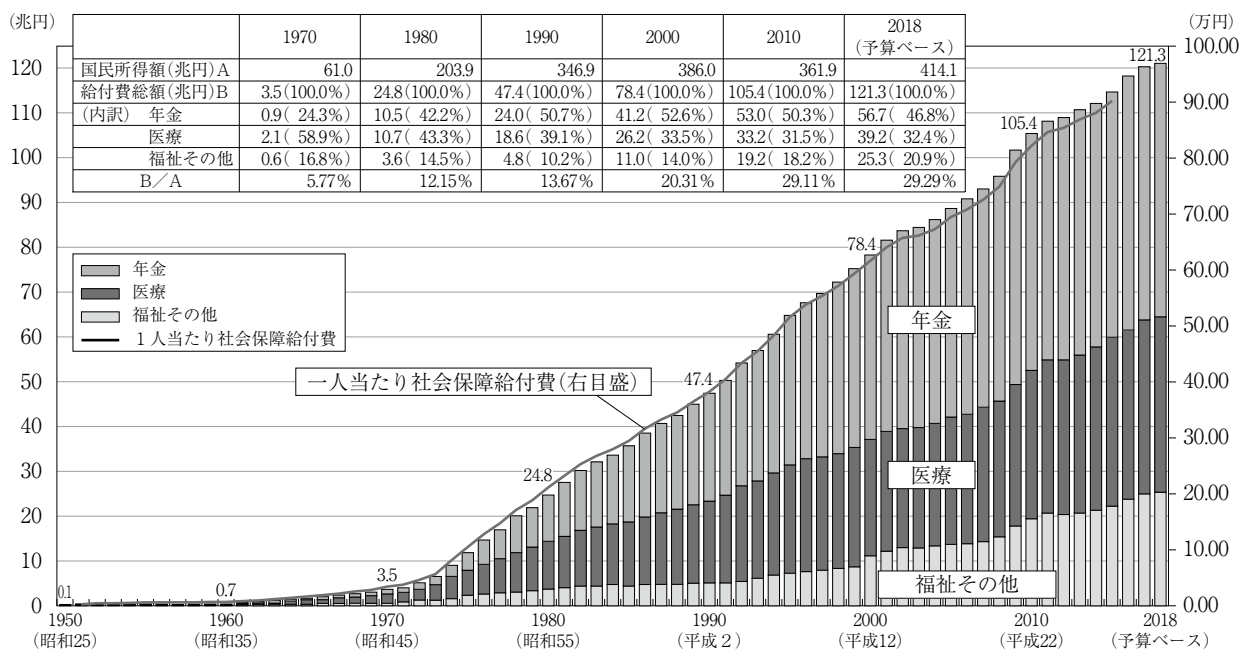
また、胃がん・大腸がん・乳がんは、5年生存率が70%を超えており、がん発症後、がんと共に生きる人も増加している。がん患者とその家族は、精神的、身体的な不安や、仕事と治療の両立が難しいなどの社会的苦痛（不安）も抱えている。このように、がん（cancer）は、日本人にとって、極めて身近な存在である。

1.1 中学校・高校では、がんの予防に関して、充分教育されていない。

ある大学（女子大）の新入学生に対して、保健師が行ったアンケート調査によると、中学校、高等学校の

保健（保健体育）の授業では、「たばこ」や「アルコール」の害、及び「性病」などの教育は受けたが、「がん」と「感染症」について、きちんと学校教育（初等中等教育）の場では教わっていないとの結果が出た。

千葉県内にある女子大学1年生に2012年に行われた健康教育の講義参加者に対するの無記名自記式質問紙調査では、中学校・高等学校の健康教育の授業で、「しっかり教わった」項目として、多くの学生が挙げたのは、「喫煙の健康への影響（65.0%）」「飲酒の健康への影響（61.9%）」「薬物の健康への影響（69.0%）」であり、いずれも60%を超えていた。また、逆にしっかり教わったと答えた学生が、もっと少なかったのは、「がんの予防」（13.9%）、「医薬品の適切な使用方法（18.4%）」であった。



資料：国立社会保障・人口問題研究所「平成27年度社会保障費用統計」、2016年度、2017年度、2018年度（予算ベース）は厚生労働省推計、2018年度の国民所得額は「平成30年度の経済見通しと経済財政運営の基本的態度（平成30年1月22日閣議決定）」
 (注) 図中の数値は、1950、1960、1970、1980、1990、2000及び2010並びに2018年度（予算ベース）の社会保障給付費（兆円）である。

図3 社会保障給付費の推移

発癌の仕組み、発がん因子、（感染症では、細菌感染とウイルス感染の違いなど）に関して、中学校、高等学校などの初等中等教育では、充分には教わっていない。

がんに関する信頼できる情報を広く普及させることは、正しい予防や早期発見に関する知識を浸透させ、適切な対処方法について学びの機会を提供するとともに、自分だけでなく周りの大切な人を守ることにつながる。がんに関心のある人は多く、患者・家族を含む一般向けにわかりやすい教育や啓発の資材や手法の開発が求められている。

ヘルスリテラシー教育の重要性・『生涯教育としてのヘルスリテラシー教育』

生涯教育としてのヘルスリテラシー教育として、生涯教育を担う放送大学で講座を作ろうと考えた。そこで、「がん」について講義を行うオンライン講座「がんを知る（Understanding Cancer in Japan）」を開講した。

1.2 日本の社会保障費・医療費からみる重要性

日本の政府は、急速な高齢化に対して、制度改正を行いながら、必要な給付の確保を図ってきた。この結果、日本の年金・医療費・介護費を含む社会保障費は増加を続け、現在では100兆円を超えている。医療費の伸び率の抑制・鈍化は、日本国の重要な課題である。この医療費の増加を抑制する観点からも、ヘルスリテラシー教育は、重要である。（図3）

2. 方法

2016年4月から放送大学 生活と福祉コースオンライン講座「がんを知る」を開講した。

がんという病気、その原因、予防や治療の概要について、入り口になるような知識と対応策を知ることには、自分だけでなく周りの大切な人（家族・友人）を守ることにつながる。また、がん患者とその家族は、精神的、身体的な不安や、仕事と治療の両立が難しいなどの社会的苦痛（不安）も抱えている。この不安を解消するため、病気の解説だけでなく、がんがもたらす患者・家族への不安や苦痛を解決するため、社会的、公衆衛生的課題や、医療倫理、創薬や医療技術開発、医療政策や福祉政策など多様な視点から、「がん」について講義を行うオンライン講座「がんを知る（Understanding Cancer in Japan）」を開講した。

オンライン講座「がんを知る（Understanding Cancer in Japan）」の構成は、次のようになっている。

- 1 講義は、全15回からなる。
 講義期間は、4か月であり、並行する放送講座（15回・15週間と合わせて、各回の受講可能開始日をずらしており、学期のはじめに、すべての回の講義を受講可能ではない。
- 2 講義は、講義内容は、ホスト役とゲストスピーカーによるプレゼンテーション、テーマに関するディスカッションからなる。

- 3 1回の講義のプレゼンテーション部分は、約45分程度であり、3つのパートに分けられる。
- 4 パートごとに、理解度確認のための多肢選択（択一）の確認テストを行う。
（正解しなくても、次のパートに進むことが出来る）
- 5 1回の講義終了時に、多肢選択（択一）10問の各回ごとのテストがある。
- 6 全15回を、3つのブロックに分け、1つのブロックが終了した時期（開講後1か月後、2か月後、3か月後に2週間のディスカッションの期間を設け、学生同士、ディスカッションを行う。
 - 1回目（講義1～4：総論、がん研究、予防、検診）
 - 2回目（講義5～10：がん各論、緩和ケア、在宅緩和ケア）
 - 3回目（講義11～15：がん治療トピックス、がん対策、まとめ）
 ディスカッションは、講義内容に関するディスカッションをオンライン上で行う。
 オンライン上の積極的な意見、コメントと、レポート作成に向けた情報交換、議論への積極的な参加を評価する。
- 7 第4月にレポートを提出する。レポートのテーマは、各自に任せる。レポートには、合わせて講座の感想も記入する。
- 8 受講生の進捗を管理する目的で、毎週月曜日にメールマガジンを、全受講者に送っている。メールマガジンには、最新のトピックスや関連情報を提示し、また該当する週の講義のポイントを書いている。さらに、レポート作成の参考になるように、レポートのテーマの選び方、情報収集や資料の読み方について解説している。

全15回のタイトルを以下に示す。

- 第1回 がんを知る 講座の目的と背景
- 第2回 がんの発生メカニズム
- 第3回 がんを予防する
- 第4回 がん検診を正しく知る
- 第5回 がんの治療と療養の実際1 乳がん
- 第6回 がんの治療と療養の実際2 肺がん
- 第7回 がんの治療と療養の実際3 大腸がん
- 第8回 がんの緩和ケア
- 第9回 がんの在宅緩和ケアの現状と将来
- 第10回 がんの在宅緩和ケア がん患者と家族を支える仕組みづくり
- 第11回 がん治療のトピックス 放射線治療
- 第12回 がん治療と研究のトピックス がんの薬物療

法

- 第13回 がん対策を考える 総論
- 第14回 がん対策を考える 地域の視点
- 第15回 まとめ がんとともに生きる社会づくり 患者・市民の視点から

受講の流れ（全15回）

1. 事前学習
講義内容について、関連資料を提示する。
（オンライン講義サイト、関連リンク）
2. 講義
受講生は、講義を視聴する。
各講義は2-3のパートに分かれており、パートごとに理解度確認のための確認テストを行う。
3. 小テスト
講義終了後に小テスト（各10問）を受験する。
4. 講義の復習
関連情報で講義内容を振り返り、より詳細な資料を参照する。
5. アンケート
講義の内容に関するアンケート（感想、質問、意見など）に回答する。
6. ディスカッション
15回の講義について、
 - 1回目（講義1～4：総論、がん研究、予防、検診）
 - 2回目（講義5～10：がん各論、緩和ケア、在宅緩和ケア）
 - 3回目（講義11～15：がん治療トピックス、がん対策、まとめ）
 に、講義内容に関するディスカッションをオンライン上で行う。
7. レポート作成と提出
ネット環境があれば、どこからでもいつでも何度でも聴講することが可能である。

3. 結果

3.1 受講者数

開講後の、2016年1学期 履修者数は968名（男性339名、女性629名）であり、単位取得者は555名（男性186名、女性369名）、単位取得率は57.3%（男性54.9%、女性58.7%）であった。ついで、2016年2学期は、履修者数は754名（男性243名、女性511名）であり、単位取得者は446名（男性140名、女性306名）、単位取得率は59.2%（男性57.6%、女性59.9%）であった。

3.2 都道府県別受講者数

図4に、都道府県別の受講者数を示す。東京都の195名を参考に、神奈川県53名、大阪府51名、千葉県49名、愛知県49名、埼玉県48名、北海道43名と続き、総ての都道府県に受講者が居た。

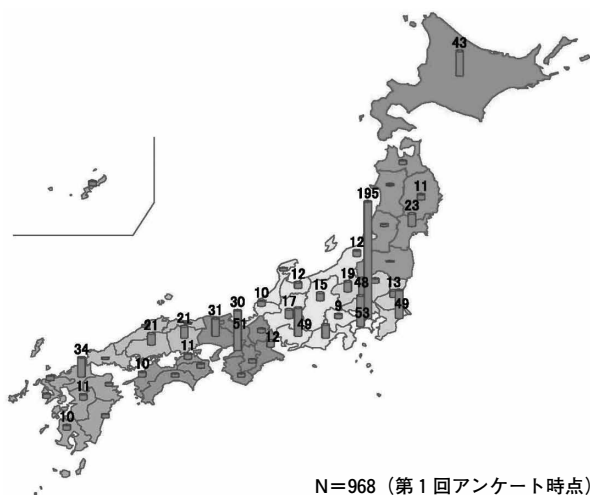


図4 「がんを知る」2016年第1期都道府県別受講者数

全体について、当てはまるものを選んでください

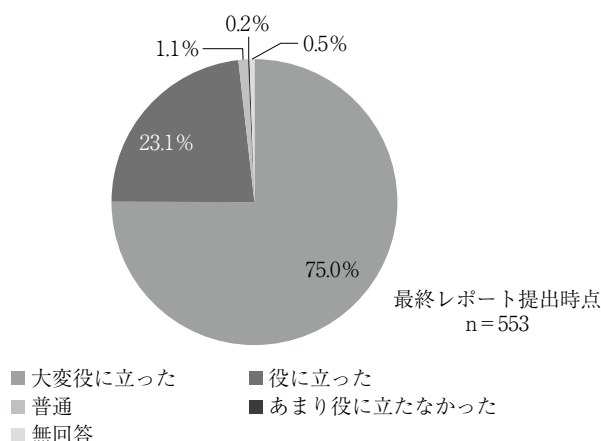


図5 オンライン講座「がんを知る」2016年第1期

がんを知る

学期		男	女	総計
16年1学期	申請者数	354	665	1019
	履修者数	339	629	968
	単位習得者数	186	369	555
	単位習得率	54.9%	58.7%	57.3%
16年2学期	申請者数	249	541	790
	履修者数	243	511	754
	単位習得者数	140	306	446
	単位習得率	57.6%	59.9%	59.2%
17年1学期	申請者数	203	431	634
	履修者数	190	407	597
	単位習得者数	140	306	446
	単位習得率			

全体のわかりやすさ

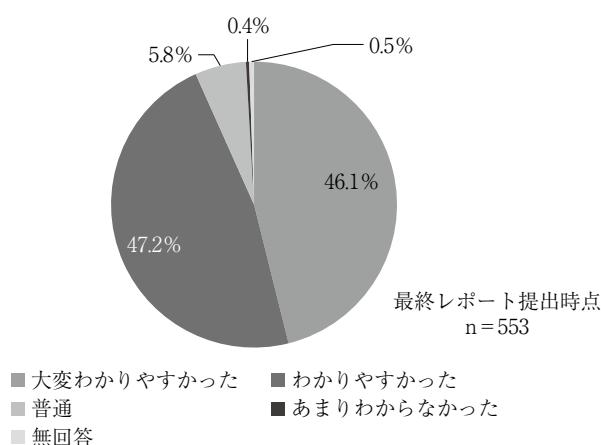


図6 オンライン講座「がんを知る」2016年第1期

3.3 レポートの課題

レポートの課題として、「がんと遺伝子検査」、「北海道における禁煙支援活動の現状と課題」、「和歌山県の胃がんの年齢調整罹患率を下げるための提案」、「なぜたばこをやめないのか。禁煙率の上げ止まりを探る」、「がん検診受診率を向上させるための改善提案」などが挙げられる。

3.4 受講生からの評価

オンライン講座「がんを知る」2016年第1期のレポートに添えられていた感想をまとめると (n=553)、(図5)

講義が、「大変役に立った」が75.0%、「役に立った」が23.1%であった(図5)。全体の分かりやすさは、「大変わかりやすかった」が46.1%、「わかりやすかった」が47.2%、「普通」が5.8%であった(図6)。課題(テスト、ディスカッション、レポート)の量に関しては、「適当」が22.4%、「やや多かった」が59.5%、「とても多かった(多すぎる)」が16.8%であった(図7)。この講座の受講を他の人に勧めたいかについ

課題(テスト、ディスカッション、レポートなど)の量

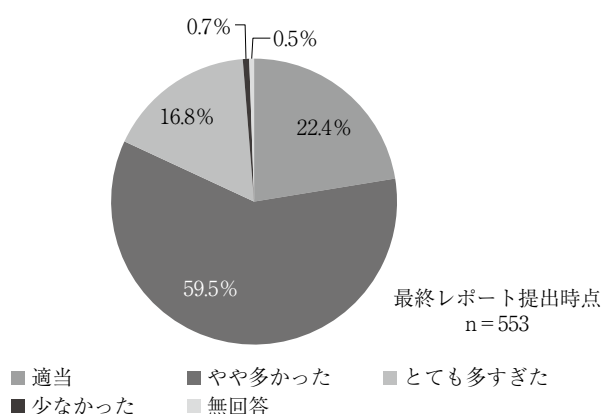


図7 オンライン講座「がんを知る」2016年第1期

ては、「強く勧めたい」が36.5%、「勧めたい」が53.2%、「どちらともいえない」が8.1%であり、「あまり勧めない」が1.4%であった(図8)。

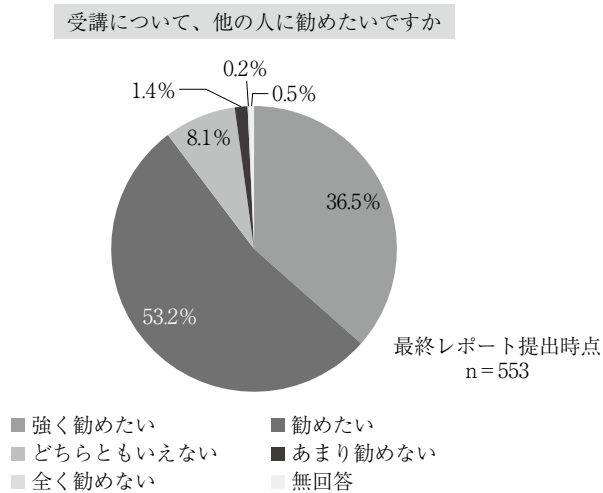


図8 オンライン講座「がんを知る」2016年第1期

3.5 自由回答

同感想の自由記載の内容を、いくつか挙げると、

- ・講義が非常にわかりやすかったです。
- ・知る事で怖れを和らげられるし、誤った情報に惑わされるリスクも軽減します。
- ・がん対策基本法があることを初めて知りました。
- ・こんなにも深く考えさせられる講義になるとは思いませんでした。
- ・ディスカッションでの皆さんの熱心さにも感心しました。
- ・たくさんの方々が、この授業を受けることを望みます。
- ・ディスカッションに参加して、自分一人で受講しているのではないと実感でき、孤独感を感じることがなかった。

等があった。

4. 考察

4.1 受講者

2016年1学期（開講時）は、約1000名の受講者がおり、オンライン講座としては、予想以上に多かった。受講者は、日本全国に居り、全国的な関心が深いといえる。

受講者の男女比であるが、女性が男性の2倍以上と多くなっている。乳がんを第5回で取り上げており、また乳がん、子宮頸がんなど、比較的若年発症の女性特有のがんがあることと、時期的に日本の女性タレントでがん患者が居り、がんに対する社会的な関心を持つ女性が多かったことが理由の一つと推察される。

4.2 レポート課題

受講者が、比較的自由に選んだレポートの課題であるが、「がん検診」、特に「がん検診率を上げる方策」、「たばこの害・禁煙支援」、「がんの治療法」特に放射

線治療と化学療法、「緩和ケア」に関する課題を取り上げた受講生が多く、「がん検診」、「たばこ」、「放射線治療・化学療法」、「緩和ケア」に対する関心の多さを、伺いすることが出来る。

4.3 受講者の評価

受講者の評価は高い。講義内容が、「役に立つ」、「分かりやすい」、「他の学生に勧めたい」との評価であり、講義の構成、講義内容が適切であると考えられる。

しかし、課題（テスト、ディスカッション、レポート）の量に関しては、「やや多かった」が60%であり、「とても多かった（多すぎる）」が17%であり、「適当」であるの22.4%を大きく上回り、本講座の単位取得率が、60%を若干下回る理由になっている可能性がある。しかし、他のオンライン講座の単位取得率は、本講座より、さらに低いので、オンライン講座特有のものかもしれない。他の講座も含めて、今後も検討する必要がある。

4.4 自由記載

自由記載のコメントも、評価が高い。また、放送講座と異なり、インターネット上でのディスカッションがあり、他の受講生の意見やコメントを読み、またコミュニケーションを取ることが出来る点は長所である。これにより、自分一人で受講しているのではないと実感でき、孤独感を感じることがなかったことは、放送講座という一方的なパッシブな授業ではなく、オンライン講座が、アクティブな科目であることを示すと考えられる。また、受講生の連帯感を生むことになる。この点に関しては、本講座終了後も、受講生の有志を集めて、メーリングリストを立ち上げて、インターネット上でコミュニティを構築して、コミュニケーションを図っている。これは、アフターサービスでもある。

5. 結語

オンライン講座によりパソコンやスマートフォンなどのデジタルデバイスに習熟する必要があるものの、一度に多人数が簡便にがんについて学びを得る機会を持つことが可能になった。

双方向性のメリットを活かし、タイムリーに受講生の関心のある情報や最新の取り組みを案内することにより、個別の課題やニーズにあった学習の機会を提供できると考えられた。双方向性を活かし対話や正しい知識の普及が進むことが期待される。

引用文献

- 1) 主な死因別にみた死亡率の年次推移 人口動態調査 平成25年までの動向

(2018年11月16日受理)